やながわ人物伝 1

戦国時代を生きぬき柳川をつくった男

田中吉政画像／眞勝寺蔵

田中吉政

（たなか よしまさ）

（1548～1609）

田中吉政は持ち前の知恵と勇気で筑後三十万石の大名になり、柳川城の城主として柳川の町作りに取り組みました。

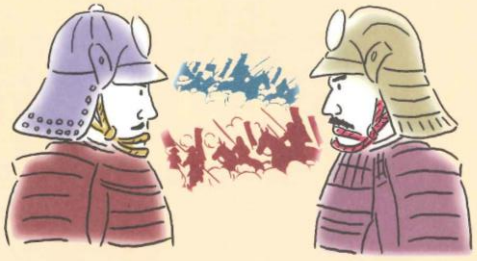
豊臣秀吉の天下統一を助ける

田中吉政は、今から四百五十年以上前、近江の国（今の滋賀県）に侍の子として生まれました。当時、全国を支配していた室町幕府の力が弱まったため、大名たちは領地を広げようと各地で戦争を始めていました。吉政は、豊臣秀吉の甥、豊臣秀次の家来になり、戦や秀次の領地を治めるのに活躍します。一五九〇（天正十八）年、秀吉が天下統一を果たすと、吉政はこれまでの働きが認められ、褒美として領地を与えられ大名に取り立てられました。

この後、秀次が秀吉から罪を着せられ切腹させられる事件が起こります。普通は主君が罰せられると、家臣も同じように罰せられます。ところが吉政は、罰せられるどころか領地を増やしてもらいました。それは秀吉が吉政の実力を認めていたからです。

関ヶ原の戦いで手柄をたてる

一五九八（慶長三）年、秀吉が亡くなりました。秀吉に従っていた有力大名たちは、協力して幼い秀吉の子、秀頼を助けて国を治めていくことになりました。しかし、大名たちは次第に、徳川家康をリーダーにしようというグループと、秀頼を盛り立てようとする石田三成たちのグループに分かれ、対立するようになります。そして一六〇〇（慶長五）年、家康が会津の上杉景勝と戦をしに行った隙に、石田三成たちのグループは家康を倒すために行動を起こしました。家康は上杉攻めに従っている吉政たちとこれからのことについて会議を開きました。吉政は三成と戦うことを主張し、武将たちの賛成を得ることに成功しました。徳川家康が率いる東軍と石田三成が率いる西軍との戦いを「関ヶ原の戦い」といいます。戦は東軍が勝ち、吉政は石田三成を捕えるという大手柄を立てました。



柳川城の城主になり、柳川の町を整備する

関ヶ原の戦いで大活躍した吉政は、褒美として今の柳川、久留米を含む筑後国三十万石を与えられました。吉政が初めて柳川にやって来たのは一六〇一（慶長六）年のことでした。吉政は柳川城を本城に決めて、すぐに国作りにとりかかりました。城下町の町並みを整え、柳川城と久留米城とを結ぶ道路を造り、道路沿いには新しい町や市を造りました。さらに、それまでバラバラに造られていた有明海の干拓堤防をひとつにつなげました。この堤防は「慶長本土居」と呼ばれ、その後の有明海干拓の起点になります。

このように筑後一国の領主として柳川に入った吉政は、次々と土木工事を行いました。吉政が柳川を治めていたのはわずかに八年ほどでしたが、今の柳川の町を築き上げたのは吉政なのです。

ためし読み『やながわ人物伝』　人物伝１　田中吉政（たなか よしまさ）要約文　※原本では本編が続きます。